



■ CO-DIALOGUE

辺口芳典

(詩人/写真家)

×

小菅庸喜

(archipelago 店主/プランナー)

Review by Spectator

— 野口草海 (美術批評家/詩人)

■ オープン北加賀屋

- みんなのうえんラボ  
金田輝孝 (NPO 法人コードハチ)
- 旧千鳥文化住宅再生日誌  
藤成健勝 (dot architects)
- 街と路上の風景図鑑  
MASAGON (アーティスト)

■ TOPICS from CFCO

■ RELAY COLUMN

石橋洋人 (株式会社 Backpackers' Japan  
取締役/広報・PR)  
上田信義 (時代 (詩人)/NPO 法人「こえとことば  
とこころの部屋」代表)

“paper C” by Chishima Foundation for Creative Osaka

no. 014

May. 25, 2017

paper

<http://www.chishimatochi.info/found/>





## CO-DIALOGUE

### 辺口芳典

(詩人/写真家)

1973年、大阪府生まれ。2010年、此花区梅香に立ち上げた「黒目画廊」[OTONARI]を拠点に詩人・写真家として活動。2017年3月にオープンした宿泊施設「The Blend Inn」のディレクションを手がける。詩集『Lizard Telepathy, Fox Telepathy』(Chin Music Press / 2014年)を発売。



### 小菅庸喜

(archipelago店主/プランナー)

1982年、埼玉県生まれ。2007年からURBAN RESEAH DOORSにてバイヤー、ブランドプランナーを経験。2016年、夫婦でJR古市駅前にセレクトショップ「archipelago」をオープン。買う環境や経験に着目し、消費のスピードを穏やかにすることを目指し活動している。

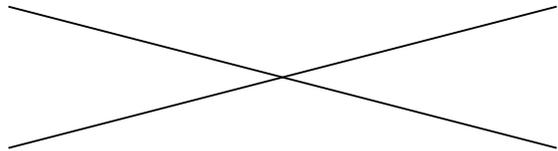
収録日: 2017年4月27日(木)

場所: The Blend Inn ~ The Blend Apartments [大阪府大阪市]



photo: Mai Narita

## Yoshinori Henguchi



## Nobuyuki Kosuge

情報の速度・合理性が求められる現代社会では、政治や芸術などの大きな枠組みから、ニュースの見出し、コンビニのコーヒーメーカーといった暮らしの細部に至るまで、あらゆるレベルで物事・情報の“わかりやすさ”に比重が置かれています。その価値を享受しつつ複雑なままある“わからなさ”と向き合う態度も、今の社会だからこそ重要です。今回のCO-DIALOGUEでは、「都市の時間と、そこから生まれる言葉」をテーマに、大阪・此花区に宿泊施設「The Blend Inn」を立ち上げた詩人・辺口芳典氏、兵庫・丹波篠山のセレクトショップ「archipelago」店主の小菅庸喜氏にお話いただきました。

参考文献:  
○『Casa BRUTUS特別編集【最新版】理想の暮らしが買える店2』(マガジハウス/2017年) ○著・馬場正尊+Open A『RePUBLIC 公共空間のリノベーション』(学芸出版社/2013年) ○『写真で見える此花区』(市制100周年記念事業 此花区実行委員会/1990年) ○『此花区史』(此花区役所/1955年)

## まちの記憶をより良くする、 体験のための時間づくり

小菅: 僕は兵庫県の丹波篠山で、「archipelago」というお店を夫婦で運営しています。辺口さんはいま宿泊施設に携わっているそうですね。

辺口: この春、大阪・此花区にオープンしたホテル「The Blend Inn」のディレクションを、詩人の活動のひとつとして行っています。また、短期滞在型のアパート「The Blend Apartments」も同じ地域に立ち上げていて、どちらも運営をオーナーの溝辺佳奈さん、そして長年の相棒・溝辺直人とともにディレクションしているんです。佳奈さんには、これまで携わったゲストハウス運営のノウハウを發揮してもらいつつ、それぞれの得意を生かした体制で、詩人がホテルやアパートのディレクションに関わらせてもらっています。

小菅: なかなかない体制ですよ! 先ほど、The Blend Innを見せていただきましたが、とても気持ち良い空間でした。設計はどなたがされたんですか?

辺口: The Blend Innの母屋は、建築家・島田陽さんに依頼しました。彼が手がけた《六甲の住居》を雑誌で見て「これだ!」と、話を持ちかけて。ちなみに、今まさに文化センターとなる離れを施工中で、そこらはdot architectsさんに設計と施工をお願いしています。なので、ホテルの本格的な完成はもう少し先なんです。

小菅: 僕も宿泊という体験に興味があって。今のお店をはじめ10年ほど前、「URBAN RESEARCH DOORS」でプランナー/バイヤーをしていたのですが、その頃から宿泊の可能性について考えていました。ともすれば表層的になりがちファッション業界ですが、暮らしの提案を行うとき、朝起きて夜寝るまでを扱う“宿泊”という要素があることで説得力が増す。また、今のお店はまちから少し離れた立地にあるので、買い物をする前後の時間・体験も含め丁寧につくり込みたいと考えて

archipelago  
小菅氏が夫婦で経営する兵庫県篠山市のセレクトショップ。2016年5月オープン。JAの穀物倉庫を改装した開放的な店舗で、服やアクセサリー、書籍、器など暮らしに関わるアイテムを販売している。特に器は手仕事の作品が多く、都司庸久・慶子、鈴木裕など、前職時代より小菅氏と付き合いのある作家の作品が並ぶ。店名のarchipelagoは「群島、島々」を意味する英語で、「さまざまな文化が根付く島々を、家族で小船のついでに渡ってきたい」という願いから名付けられた。

<http://archipelago.me/>

The Blend Inn  
大阪市此花区梅香にある宿泊施設。2017年3月にオープン。さまざまな人たちの個性が混ざり合い、つながる場づくりを目指す。3階建ての「宿泊空間」と、離れの「小さな文化センター」から成る。「private room」と「shared room」の計7室に加え、シェアキッチン併設。パブリックスペースの多い、風通しの良さを持った建築が魅力。

<http://www.theblend.jp>

いて、だからこそ“宿泊”も挑戦してみたい領域です。辺口さんは、どんな経緯でホテルのディレクションを手がけることになったのですか?

辺口: 流れはシンプルで、詩人として「どうやって詩を書いて生きていくか?」を考え、試行錯誤してきたんです。縁あって此花区の梅香という地域で、当時バンドメンバーでもあった溝辺と自分の作品やパフォーマンスを発表するギャラリー「黒目画廊」、カフェ兼案内所「OTONARI」をはじめ、詩と出会う間口を広げていくための場をさまざまな形でつくってきた、その延長にホテルがある感じ。場所を展開していくきっかけは、「Central East Tokyo (以下、CET)」という東京の空き物件を利用

したイベントですね。特に機材や道具がなくても、ほど良い空間と明かりがあれば、作品の発表や販売を通して、人とのつながりが生まれるんだと気づいて。場所を持つことの可能性を感じたことが大きいです。

小菅: 僕も大学生のときに、友人とCETビルの屋上に小屋を建てて、会期中そこにずっと住んでいました。隅田川を拠点とするホームレスの人たちに、銭湯の熱湯事情や拾ってきたソーラーパネルでテレビを観る方法、タイヤが付いた移動式の住居など、地域の情報やサブカルチャーの術を教えてくださいながら、それをアーカイブしていったんです。そのとき、彼らが自分たちの生活を豊かにするべく“ものづくり”をしていると感じて。同時に住民やホームレスの人たち、近所の小学生が遊びに来てくれるので、お茶を入れたり、展示を工夫したり、小屋で過ごしてもらった時間も意識しましたね。

辺口: おもしろい! そのときから、体験のための時間を考えていたんですね。ちなみにOTONARIの建物は、40~50年前、六軒家川沿いに建てられた違法建築からはじまっているんです。住み続けたことで権利が発生して。先ほどのホームレスの話じゃないけれど、お金や家がないながらも自分たちの知恵を使って勝手に建物を建て、それが国に

黒目画廊  
2010年にオープンした此花区にあるギャラリー。自らの制作・発表のためのスペースとして、相棒の溝辺氏らとともに立ち上げた。辺口氏が制作した詩の展示・販売のほか、詩の朗読やライブ、トークイベントなどを企画している。2016年5月から長い夏季休業中。

OTONARI  
2012年にオープンした此花区の案内所兼カフェ。辺口氏がゲスト・アーティストとしてドイツで暮らした体験をもとに、人や場所をつなぐ「間」として開店。外からやってくる人たちに此花区を案内する一方で、地元の人には新しくできた場所を紹介し、年齢や職種を越えて人々がつながる場となることを目指す。店内での活動のほかに、実際にまちを歩きながら案内する「ワンダー・タウンツアー」も行われた。2014年3月に閉店。

Central East Tokyo  
2003年より、東京R不動産などを手がけるOpen Aの馬場正尊氏が中心となり、東京・日本橋エリアの可能性を広げ、実験していくムーブメントを企画。空きビルを利用し、定期的に展覧会やシンポジウムを開催。クリエイティブな活動の土壌をつくり、場所がさらに人を呼び、リノベーション、インフラ整備が進んだ。

認められたって最高じゃないですか。まちの歴史としてもおもしろいし、表現としても、都市を記号で占拠していくグラフィティの、その先を行っていると思う。

小菅: 今もその建物はありますか?

辺口: あるにはあるんですが、ほかの人がその建物で活動したり、引き継いだりすることができないんですよ。そういった地域の事情や歴史を運営するなかで知りOTONARIを閉めることにしました。まちの魅力を言葉にしなが、外から来た人を案内する、詩と出会ってもらう間口を広げる活動だったので、先のビジョンが見えないまま活動しては元も子もなくて。この土地で暮らしてきた先輩たちに敬意を払いながらも、その先に行かないといけない。そのためには今の時代にふさわしい新しい工夫が必要だと思ったんです。

孫の代、その先の代も土地を借りられて、また新たな活動をはじめることのできる場所をつくるには、結局、正攻法しかないんですよね。そういった経緯もあり、いろんな人の知恵を結集して新築したのがThe Blend Inn。次代につなげていくための場所、詩人の活動としても、ひとつ大きな楔が打てたのではないかなと思っています。とはいえ、オープンから1年も経っていないので、まだまだこれからです。

## 日々育まれるビジョンから、 これからの歩みを考える

辺口: 突然ですが、小菅さんってお子さんいらっしゃいますか?  
小菅: 息子が5歳、娘が1歳になりましたね。4人家族です。  
辺口: 僕も娘がいて、もうすぐ2歳。詩人の子育て、僕は革命じゃないかと思っています。今の家は風呂がないから引っ越したいんですが、金銭的にも難しく。ガスもないので、ペーパーバスに水を入れて、ポツ



The Blend Innに訪れてくれた人をまず案内するお好み焼き屋があって、「森屋」さんっていうんですけど、大阪の下町を体現するような小さなお店、おしん、安さ、ボリューム、楽しさを兼ね備えていて、次から次とお好み焼きを焼く森さんのその姿は「湯通しのジェフ・ミルズ」を思わせます。(辺口)

六軒家川沿いに建てられた違法建築六軒屋川をはじめ、正蓮寺川、傳法川といった河川に囲まれた此花区。物流の要となるこのデルタ地帯は、住友電気工業や大阪ガスなど大手企業の工場やその関連企業が集まり、第一次世界大戦の特需を受け急速に発展した。1955年には区面積の63.5%が工業地域となる。工業の発展による区の人口増加は著しく、1965年には過去最高の88,792人にのぼる(2014年の人口は、66,198人)。違法建築の背景には、戦中から続く此花区一帯の盛衰も関係しているのかもしれない。

トで湧かしたお湯で温度調整するんです。だから、うちされたら終わり(笑)。「こんなところで育てたら怒られるなあ」とか思いながら、実際にいろいろな方に怒られながら……。なのに、懲りずにもう1人子どもほしいなと思っていますね。なかなか許してもらえないけれど。

小菅: 結婚されて、お子さんも生まれ、ホテルやアパートでも、いろいろな変化の最中にいるんですね。詩の表現って環境で変わりますか？

辺口: 詩人は常に変化するものだと思っています。子どもや友だち、移動すること、時代が反映される。しかもThe Blend Innという大きな目標が、実際に目の前に見える風景となって、だいぶ変わりましたね。

小菅: 出会う環境によってどんどん更新されるんですね。逆に、詩人が社会にどうコミットしていくか、考えることってありますか？

辺口: どちらかというと、ビジョンがあるかな。詩を書いて、この社会で生き続けたいというイメージ。100歳超えても書き続けていたら、さぞかしおもしろいだろうと思うんです。これまでもエッジがきいているけれど、年齢を重ねるごとに詩は良くなってきていて、自分を満足させるものになっている。それを持続させるには、子どもや孫がいた方が書けると思っています。それがないとどこかで止まってしまう気がする。

小菅: 僕も奥さんの明るさや推進力、子どもの素直さにどこか助けられている気がします。お互いで補い合っているような感じ。

辺口: 子ども2人、しかも男と女っていうのもいいですね。あと、憧れて

口にするお父さんもいますけど、僕は諸手をあげて行かせたいな。「幸せになればよ」って送り出すけど、でも引き止めたい。育ててきた20～30年間を経て、それまでの喜びやわだかまりなど、お父さんにしかわからない感覚があるのだろうなと。

辺口: うちの妻のお父さんもそんな感じでしたよ。僕らみたいないい歳の大人2人が、なんとなくけじめとしてやっとかかという感じの結婚式なのに。うちの母親と、向こうの父親がお互いにハンカチ渡し合うみたいな(笑)。そう思うと醍醐味がありますね。いい歳して泣きたくないのに、出ざるをえない何かがある。

小菅: 声出して泣いていましたね。

辺口: 俺もやばいかも。詩人が泣きながら嗚咽をもらすとか(笑)。

## 「なんかええやん」を 保留し続けていくこと

小菅: The Blend Innを一から建てるにあたって、地域への配慮や押さえどころって、何か意識しましたか？

辺口: 地域に“頼りすぎない”ことですかね。「詩人」を生かしたいから

土地なりにやるべきことがある。集落の自治会・消防団に入り、隣土のつながりを大切に。都会だから、田舎だからではなく、どこにいても暮らしのなかでどこまで見えているかによって行動は変わる。

辺口: 地元の人は、新しいお店についてどう思っているんですかね。

小菅: 幸い、受け入れてもらえたようで、70～80歳くらいの先輩方がお店で

コーヒー飲みがてら、まちのことを教えてくれるんです。丹波篠山は城下町があり、観光地でもあるんですが、お店があるのは中心地から離れた「古市」という地域。郊外型スーパーができるまでは、古い街道筋の宿場町として、人とものが溜まる場所だったらしいです。もともと新しい文化や資源に寛容な地域なので、僕らみたいな若者がお店をはじめることにも反応してくれる。数少ない小・中学生も店に入ってきて「すげー！」って(笑)。建物の横が通学路なので、「帰りました～」「おかえり～」みたいなやりとりもありますね。この1年で、みんなの暮らしの一部になってきているのかなと。

辺口: 実際にやってみて思うことって多いですね。朝方のThe Blend Innで、いろんな人たちと1階のテーブルでご飯を食べていると、いい意味で緊張感があるんです。そこで詩人がたまに詩の話をするわけですよ。興味ない人は「詩人？」って。その感じ。でも朝ご飯が美味しいからビリビリしない。いい匂い、いい日差しのおかげで「詩はよくわからないけど、こうやって触れられるのっていいかも」って。The Blend Innのあの空間では詩を「美しいもの」として見てもらえるんです。

小菅: 泊まる・寝る行為は、例えば犬がお腹を向けるのと同じで、自分の身体を晒しながら「開いていますよ」ということだと思うんです。夜泊まって、朝起きていいものを食べれば、「なんかいいかも」となる。その「なんか」ってすごく大事な気がします。

辺口: それ「somehow」ですね！ The Blend Innの1階に入っているサンドイッチ屋さん「Mirow」のエリツインが持っていたトートバックに手書き文字でsomehowとあって。気になって意味を聞いたら「なにか」という意味らしいと教えてくれました。そのとき、「なにか」って詩人

にとってすごく重要なワードだなと。

小菅: 前の会社でも、お客さんが言う「なんか、あのお店いいよね」の「なんか」の部分は、ガチガチにディレクションして表現したものではなく、スタッフや空間、発信する物事から醸し出る、出汁みたいなものだとよく話していました。醤油や日本酒をつくるにも、いろんな菌の役割があって、その組み合わせでしか表れないものがsomehowなんだと思います。

辺口: 詩人は、意味の表現でもあるから、カチッと一言で言えてしまったりするんです。カチカチに固まってく感じ、それが気持ち悪いから詩を書いているはずなんだけど、固め過ぎず溶かし過ぎずのバランス感覚が詩人には大切なんじゃないかな。ディレクションも同じくカチッと書いてしまうけれど、意味として書き切らないことが大事。somehowをもう1回意識しないといけないな。場所は詩人のものでもないし、場所だけが立っていてもおもしろくない。

小菅: 僕も「醸す」や「気配」を気にしながらお店をやっていますね。

辺口: それが自分では楽しかったりするんですね。「これだ」と見せつけられても楽しくない。近い人には、つい言葉で「これはこうでこうなんだ」と強く言い切ってしまうこともあるけれど、そういうのは言う側も、聞く側も、気持ち悪さが残るんです。「なんか」が含まれた言葉や出来事のほうがちょうどいい感じ。俺のsomehowは「たかだか」にも近い。何をやろうが「たかだか」。「所詮」って感覚。梅田の真ん中にビルを建てたとしてもその感覚は必要だなと思うんです。あと例えば、子どもが笑っている感じ。俺らは「貧乏暮らしやな」と言葉にして、意味にへこたれるとき、その瞬間にも子どもは元気で楽しそうで、よく笑うよ、よく泣くんです。あいつらは言葉がないのに、そうでしか出せない空気感を持っている。詩は、説明ではないから、そうでありたいですね。



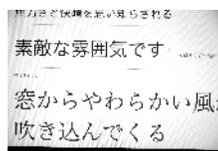
「古市は、かつて大阪方面と姫路方面に向う道分を含む宿場町として栄えた土地柄、外の土地からの人をおおらかに迎え入れてくれる気風が今なお残っています。お茶や、お花、尺八などを暮らしのなかで楽しむ方も多く、民度の高さも感じられる地域です。自然も落葉広葉樹が多く山全体が四季を通じて彩り豊かに変化していく姿はとて美しい。(小菅)



いるのが結婚指輪。男の人に会うと、左手に目が行ってしまうことがあるんですが、特に好きなことを生業にしているような人が指輪をしていると、大人だなあとします。詩人もそうならないと。

小菅: 結婚指輪を詩人はつけたほうがいい？

辺口: おもしろい詩を書き続けるのは大前提ですけどね。僕の場合は、納得できる詩を書ききったので、もう欲求は完了しているんですけど、



「yoshinorihenguchi.com」では、詩のディスプレイと販売を行っています。詩集「Lizard Telepathy Fox Telepathy」の装幀とデザインを担当してくれた庄野祐輔(デザイナー/編集者)とともに作成した辺口秀典の詩のWebサイトです。ランダムに現れるタイトルを押すと詩が読めますよ。(辺口)

「もう少しやれる」「まだ上げられる」と限界を超えていくなかで、ほかの誰かに「詩人になりたい」と思わせられるか、というのがあって。そのためには、詩人が子育てや指輪をすることは重要。いつか気に入った指輪を買いたいですね。

小菅: 僕も、普段アクセサリーをつけない父が指輪をずっとつけているのは、ちょっとカッコいいなと見ていました。

辺口: まさにそんな感じですよ。すごく感覚的ですが、指輪をはめている状況がひとつのビジョン、イメージとして僕のなかにずっとあって。

小菅: 僕の憧れで言えば、娘を嫁にやる経験してみたいですね。結婚式のときに、妻のお父さんがすごく良かったんです。普段ひょうひょうとして感情を表に出さない人だけど、そんなに泣くかってくらい泣いていて、嬉しいのと寂しいのが混ざったような、感情が漏れ出てしまった表情。それを自分も体験してみたいんです。娘を嫁にやりたくない

活動していたのに、エリアの特色に頼り過ぎるといつのまにか「此花区の辺口」になっていたりする。あくまで「詩人の辺口」が前にこないと、詩人を続けていくのが難しくなる。ただ今回、更地から新築できたということは、今後いろんな場所で展開できるはずなんです。地域をリサーチして魅力を言葉にすることは、案内所でやってきましたし、どの地域にも必ず魅力はありますから。小菅さんがお店をはじめるとき、地域を見て「ここや！」となったポイントって、どんなところですか？

小菅: 全国で探していて、丹波篠山にこだわっていたわけではないんです。住まいが大阪だったので通う機会も多く、自然と人のつながりができてきました。土地の魅力から入り、人の縁に引っ張られた感じです。あと、夫婦にとっては引っ越し先ですが、子どもにとっては地元になります。文化も豊かで食べ物も美味しい、「ここっていいよね」と言えるかどうか。生活と生業のバランスを考え、今の場所に決めましたね。

辺口: お店をはじめると大変ですよ。僕らもプロジェクトが動くごとに大変さが増してきた。2年で完成の予定が、さらに2年かかるスケジュールになり……。その間利益が出ないから、やりくりが難しい。

小菅: たしかに。うちも11ヶ月ほど空家賃を払い続けていましたね。2015年9月に引っ越して、秋にはお店をオープン!と思っていたのですが、感覚が追いついてこなかった。わーっと舞上がった感覚が落ち着くまで時間がかかってしまったんですね。

辺口: 場所を持って1～2年活動すると、いろいろ見えてきますよ。

小菅: そうですね。周囲の環境や運営上の修正点がだんだん見えてきました。「田舎暮らしはのんびり、悠々自適」なんてことはなくて、その

□Mirow The Blend Inn 1階のサンドイッチ・ドリンクスタンド。大阪市此花区香梅にある「Maglione」のパンを使ったサンドイッチとドリンクの販売(ドリンクのみ)を行っているほか、The Blend Innの利用者に朝ごはんを提供している。

## Review by Spectator

立会人: 野口卓海(美術批評家/詩人)

私たちは生に付随する意味不明さから身を守り、ようやく世界との対峙ができるのだ。しかしそういった私たちの特性は、しばしば立ち止まることや思考することから自らを遠ざけてしまう。見えざる他者が用意したもっともらしいキーワードに、自他を縛りつけることさえあるだろう。「田舎暮らし」や「移住」。そしてまた、「アート」とか「詩人」。そういう大文字の領土では語られない、実感のはっきりと伴った営みが2人の対談からは伺い知れた。

人は「名付ける」という行為によって世界を把握し続ける存在だ。目や耳がはくわした外からの刺激は、知らずうちに保存しやすい言葉へと圧縮される。そうすることで、私

例えば、石をひとつ置くだけで、場所の様相ががらりと変わることがある。石の存在感が身体的・精神的な眼差しに影響し、私たちがより複雑にパースや焦点を探るためだ。ある場所に磁場や意味を持たせる、世界中に古くから伝わる魔法のひとつ。そしてそれは、私たちと場所との関係にも起こり続けている。店や宿を開くことはもちろん、何よりもその土地で2人が送る営みこそが大きな磁場を生んできたに違いない。人と土地が実は互いに影響関係にあるということも、もすれば忘れがちなその密約の存在を改めて思い知る。場所を区切るために用意された平易な言葉では、密約は到底結べない。今、私たちに必要なのは、数ある領域や境界の「名」をもう一度「なにか」と選んでいくような感性かもしれない。

# オープン北加賀屋

地域の出来事をひらく、伝える

都市のなかにある農園の可能性を探る  
みんなのうえんラボ



illustration: Takahiro Shimada



▲有機物が土に露する仕組みに触れる。

今シーズンの連載では、都市の農園と生態系の関係について、さまざまな調査や実験を通して考えたことを紹介していきます。私たちは、住宅街の真ん中にあるコミュニティ農園「北加賀屋みんなのうえん」を実験場に見立て、都市の農園が生態系に与える影響についてさまざまな手法で調べました。

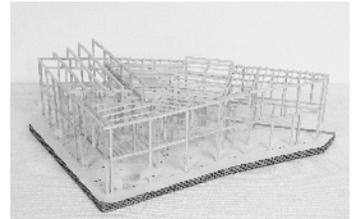
「生態系を調べる」と一口に言っても多様な見方があります。そこで今回は、まちなかの農園という状況を活かして「ヒトと〇〇」というテーマを中心に置くことにしました。田舎や山間部ほど密接な関わりではないにしても、都会でも身近にさまざまな生き物や植物がいます。その生き物たちは普段は気にも留めない存在ですが、少し違うまなざしで見つめてみることで、私たちが参加している都市の生態系の新しい姿を映し出してしてくれるかも知れません。

第1弾の今回は「ヒトと共生微生物」がテーマ。2016年10月からおよそ3ヶ月間、山口情報芸術センター(YCAM)のバイオリサーチチームとともに調査しました。野菜が育つには、太陽、水、二酸化炭素、養分が必要ということは誰もが知っていることです。しかし、土のなかでは人が計り知れない多くの微生物の働きがあり、植物との複雑な共生関係があると考えられています。これはまだ完全には解明されていません。今回調査に用いたのは、土壌内微生物の遺伝子を網羅的に解析する「メタゲノム解析」という手法。近年の技術進展によりコストが急激に減少し、どんどん身近な技術になりつつあります。調査の結果、800~1000もの微生物が農園の土壌には生息していることがわかりました。しかし、種類はわかってはそれぞれの微生物の働きを解析することは今の知識では届きませんでした。今回の調査では、何となく考えていた微生物の世界を具体的な数字や名前で見ることができ、目に見えない生き物たちに、また1歩、歩み寄れた気がしました。

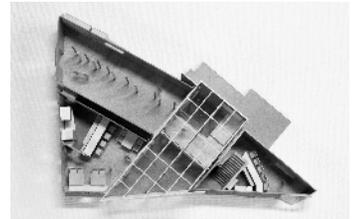
## 旧千鳥文化住宅再生日記 その4

千鳥文化住宅の改修ですが、ディレクターの服部滋樹さんの提案で「継ぐかたち 千鳥文化プロジェクト」という名前になり、北加賀屋で新しい仕事や資源の循環を生む拠点づくりを目指しています。現在、7月末オープンの予定で工事金額の調整に入っています。運営メンバーには、千鳥土地株式会社とドットアーキテツに加えて新しく小西小太郎さん(映像ディレクター/adanda主宰)が加わりました。建物の1階に入るパーは、コーポ北加賀屋のメンバーやアーティストが代わる代わるの店長となり週末のみ営業していく予定です。それぞれの日によって、また人やお酒によって、全然違う空間が立ち上がると思うととても楽しみです。

家成俊勝(千鳥文化PJ 設計担当)  
2004年、赤代武志と建築事務所dot architectsを共同設立。北加賀屋を拠点に、さまざまな企画に関わる。



▲複雑怪奇な構造を把握するためにつくられた模型。この模型で構造補強の方針を決めて行った。



▲インテリアの検討用に制作している模型。中心のサロン(吹き抜け空間)から食堂、バー、古材パルクへとつながる。

## アーティスト・MASAGONの古町東西 街と路上の異景図鑑



No. 01

マーク・ジェンキンス  
インスタレーション作品(フランス・ブザンソン)

マークは路上に異質なものを持ち込み、見る者の感情をゆさぶるトリッキーな作品をつくっている友人のひとりだ。彼の作品を見ると、都市と自然は表裏一体、僕らは常に野生の危険と隣合わせなのだ、デコピンされたようで清々しい。

MASAGON(アーティスト)/北加賀屋を拠点に活動

# TOPICS from CFCO

おおさか千鳥財団(CFCO)は、大阪で行われる芸術、文化活動の支援を通じて、地域の新たな価値を創造し、創造的かつ文化的に多様な地域社会の創出を目的として設立されました。

## NEWS

### 2017年度公募助成 対象活動決定!

当財団の2017年度公募助成には、計95件の申請があり、選考委員会を経て以下の通り助成活動を決定いたしました。



Hino Koshiro plays Virginal Variations

- ① 創造活動助成 10件 ※[]内は申請者名/申請者名五十音順
  - 「子育てと家族とアートにまつわる、考える」プロジェクト・ブックの制作、及び発行記念イベント【あべのま(アートスペース+ギャラリー)】
  - アマハラ【維新派】
  - 黒部市美術館 佐々木愛展にかかる作品制作及びリサーチ【佐々木愛】
  - 身体を通じて震災の記憶に触れ継承するプロジェクト「猿とモルターレ」アーカイブ・プロジェクト報告会(仮)【砂達暉 理】
  - みんなのためのからだ学フィールドワーク編「かじわらの触感地図をつくる」【高槻井戸端ダンスプロジェクト実行委員会】
  - 「芸術と福祉」分野をレクリエーションから編み直す【タカハン・タカカーン・セイジ】
  - Double Good 2017 EUツアー【Double Good】
  - 大阪・関西における様々なパフォーマンスにまつわるインタビュー集「Trouble Everyday vol.01」発行【塚原悠也】
  - LAGON(仮)【ナイスショップスー】
  - 街ゲリラと架空の部屋【長坂有希】

- ② スペース助成 4件 ※[]内は申請者名/申請者名五十音順
  - 空間現代「擦過」大阪公演【合同会社空間現代】
  - 前田英一演出作品「Everyday is a new beginning」滞在制作+試演会【コード企画】
  - ニプロール in 大阪クリエーション vol.2【ニプロール】
- ※連続助成2年目 ●Hino Koshiro plays Virginal Variations <密林>【日野浩志郎】

### 公募助成選考を終えて

今回は特定のジャンルに分類できない複合的な申請活動の割合が増え、また活動形態も展示・公演などイベント型活動から、複数のプログラムから成るプロジェクト型活動、ワークショップやリサーチ、アーカイブなど多岐にわたり、申請内容の多様化が感じられました。「創造活動助成」の選考では、子育て、福祉、触覚、震災の記憶などのテーマにクリエイティブな切り口でアプローチする活動、ニッチな領域に取り組む活動、更なるステップアップを応援したいアーティストの活動などを、現在の大阪の創造環境を鑑み必要と思われる要素を考慮して決定しました。10件のうち4件は2回目の助成となりますが、いずれも前回助成時の活動から更なる発展の可能性が期待できることから採択となりました。一方「スペース助成」は、今回奇しくも全案件がBLACK CHAMBERを利用する活動となりましたが、選出理由は、新たな音楽表現への挑戦、大阪ではじめての活動の支援、滞在制作による新作の創出など、それぞれ違う観点から評価されたものです。各活動がこのスペースの新たな使い方や潜在的な可能性を発掘・提示し、かつ大阪のアートシーンに一石を投じることを期待しています。



ナイスショップスー「LAGON(仮)」

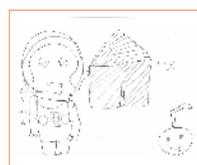
## REPORT

### 加賀屋小学校創立百周年 特別授業の実施



2017年1月、今年で創立百周年を迎える加賀屋小学校にて、全校生徒を対象に作品の対話型鑑賞を目的とした特別授業を実施しました。京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センターの講師を迎え、「楽しみながら作品をみるコツをつかむ」をテーマに、学校での事前学習を経てMASKを訪問するという充実したプログラムとなりました。授業では、「なぜそう見える?」と、問いかけを通して、作品を隅々までじっくり見ること、思ったことや感じたことを仲間と共有することを学びました。

MASKでは、各自が気に入った作品を選び、その理由やお勧めポイントを話し合いながらワークシートに記入。「普段はくっかないモノがくっついているからおもしろい」など、さまざまな意見が飛び交いました。この体験を機に、多角的な視点でアートへの親しみをもち続けてほしいと願っています。



## ACTIVITY

- 1 2016年度創造活動助成  
前田文化×劇団子供鉦人「文化住宅解体公演」  
<http://www.maedabunka.com/tsuchikabe/>



文化住宅の解体工事現場を演劇の舞台として利用した。鑑賞者は劇団子供鉦人の役者が架空の住人を演じる各部屋を巡りながら解体作業にも参加。悲鳴や怒号が飛び交うなか、壁や天井が破壊され空間が変化しつつ芝居が進行。演者観客スタッフの事故怪我なく安全作業で終了。記録編集したDVDを2017年2月から販売中(Webサイトほか)。

文・前田裕紀(前田文化・管理人)

- 2 2016年度創造活動助成  
子育てと家族とアートにまつわるプロジェクト  
<http://abenoma.com>



阿倍野の路地裏にある「アートスペース+ギャラリーあべのま」にて、子育て中の夫婦による美術家ユニット「よしだとかた」による日常生活の気づきから生まれたグッズショップと展覧会、そしてアートに携わる方々による子育てにまつわるトークイベントを開催。子育てや家族のあり方について、新たな視点で対峙するまたとない機会となった。

文・高橋静香(アートスペース+ギャラリーあべのま代表)



上田 假奈代  
Kanayo Ueda

詩人/NPO法人「こえとことばとこころの部屋」代表  
2001年、詩業家宣言。2003年新世界で「表現と  
自律と仕事と社会」をテーマにアートNPOを立ち  
上げ、2008年拠点を西成に移す。通称「釜ヶ崎で  
「釜ヶ崎芸術大学」や「ゲストハウスとカフェと庭コ  
コロム」を運営。著書『釜ヶ崎で表現の場をつ  
く 喫茶店、ココロム』(フィルムアート社/2016)。

> 上田さんが選ぶ次のコラムニストは…  
木ノ戸島幸氏 (NPO 法人スウィング理事長)  
わかりやすく、役に立つものばかりが求められ  
るけど、「ちやうねん」もつと底のところを信じ  
あえる仲間。よわい力を知っている人。(上田)

## 自走する覚悟

2010年からゲストハウスをはじめ、決してスピードは早くないながらこつこつと店舗展開をして7年が経とうとしている。ゲストハウスからまちを見てみると、地域と密接な関わりが見えてきて、だからこそ地域貢献を安易に語りぬよう強く気をつけている。

設備の共同利用や相部屋を軸にする代わりに、低価格で宿泊することができるゲストハウス。ホステルは、ここ数年の訪日外国人増加やそれに伴う施設数の増大により、かなり一般的に認知されてきたように思う。そこに東京オリンピックといううよよとした虚像も相俟ってか、いつからか

ゲストハウスと地域活性を結びつける筋書きで話されることも増えてきた。

宿泊施設はまちにとつて大きな機能を持つ。それまで通り過ぎていた人が留まるきっかけになるし、フロントでは近くのお店が日々案内される。素泊まりを基本としたゲストハウスであれば、徒歩圏内の飲食店との相性もいい。結果だけ見ればたしかに地域貢献にもなっているのだろう。けれどそれを前提に運営しては軸がぶれてしまふ。僕たちの第一の使命はまちを盛り上げることでなく、ただただ自分たちの店を良くすることである。個人的には、地域活性やまちづくりは個店レベルで計画されるには手に余る話だと思っっている。少なくとも自店の経営・運営をしながら片手間で行えるものではない。

まちぐるみか、そうでないかに関わらず、面を単位にした盛り上がりはとも良いことだと思ふ。訪れる側にとつてはなおのこと。けれどもそれれも結局は、個々の店が人に愛される店であることが大前提だ。

店や、そこで働く人が好きだから、まちを好きになるということがある。まずは自分たちの持ち場で、自分たちのできることを最大限高めること。多くの人たちに足を運んでもらうこと。まちに帰属するよりも、つながるよりも先に、自走する覚悟を。僕たちはあくまで内側から、自分たちの暮らす大事なまちを考えたい。

# コラム

つないで見える、  
人とまちの多彩なあり方

## 応答する、よわさのちから

大阪市西成区の通称「釜ヶ崎」。人によっては眉をひそめる地名だ。0.62kmに2万3千人が起居し、住所不定者が5百人ほど、生活保護受給者は9千人ほど、男性83%、高齢の単身者がほとんど。彼らの平均寿命は日本最下位。1960年代から寄場だった背景がこうしたまちへと変貌するのは、時代の流れか。そして近年、隣町の再開発が整ったことを契機に投資が始まった。空き物件には〇〇不動産の張り紙。オセロの盤のように持ち主が交わる。

さて、わたしはこのまちに関わり15年になる。喫茶店のふりをして、出会いと表現の場をつく

り続けてきた。出会って、話を聴いて事業を考え。とてもパーソナルなつくり方ではあるが、結果的にさまざまなたちのつながりがつくりになる。まちを大学に見立てお互いが学び合う「釜ヶ崎芸術大学」は高齢化を実感して立ち上がった企画だ。このまちの名を冠することは、政治的なふるまいでもある。

いずれにせよ、このまちが投資の対象となることは予測できなかった。身体反射的にいくつかの物件を押さえ、信頼しゆるやかなつながられる事業主を見出して協力的体制をとった。速やかに動いたのは、持ち前のよわさのちからだ。

さまざまな縁を失い、まちに孤住するおじさんたちの存在は再開発によって、簡単になかったものにされるだろう。それは大変にもつたないものである。彼らのぶつ飛んださらついた経験と孤独を生きてきた記憶をつないでいくことは、場所の力をつなぎ、未来への補助線となる。そう信じるからこそ、わたしは具体的に場と機会づくりに取り組む。昨年開設した「ゲストハウスとカフェと庭 ココロム」に泊まるのは旅人か、1階の庭やカフェで地域の人たちと出会う。いろんな人たちが出会うためには、場所のちからを耕さねばならない。芯はあるけど柔らかく、笑えるほろろがいい。へなちょこで、よわいからで応答する場をまちのなかにつくり続けたい。